

## 大学病院での小児在宅支援システム構築の試み

岩本 彰太郎<sup>1,3</sup>、淀谷 典子<sup>1,3</sup>、末藤 美貴<sup>1</sup>、井倉 千佳<sup>1</sup>、奥野 祐希<sup>1</sup>、  
坂本 由香<sup>1</sup>、高野 稚菜<sup>2</sup>、前田 多見<sup>2</sup>、河俣 あゆみ<sup>1</sup>、平山 雅浩<sup>3</sup>

三重大学医学部附属病院 <sup>1</sup>小児トータルケアセンター  
<sup>2</sup>医療福祉支援センター  
<sup>3</sup>小児科

少子高齢化に伴う人口・疾病構造の変化及び地域医療構想等の医療構造改革の影響を受け、大学病院の役割は、従来の「教育」「診療」「研究」に加え、地域中核病院としての「地域・社会貢献」が求められるようになってきている。

近年、増加の一途を辿る、医療的ケアを要して在宅で暮らす、いわゆる“医療的ケア児”とその家族を支えるためには、医療体制整備だけでなく、個別性の高さから福祉・教育・保健に関わる行政を含む多機関と連携し多面的に支援していく必要がある。

大学病院は、広域の小児医療体制における中心的役割を担うとともに、地方自治体行政を含む多機関・多団体と保健医療計画等で連携しやすい環境にある。この強みを活かし、大学病院が「地域・社会貢献」の役割の一つとして、医療的ケア児と家族支援体制構築に取り組むことは、大いに期待されるところでもある。しかしその一方で、大学病院の多くはアウトリーチ型医療提供に不慣れで、地域で暮らす医療的ケア児を支える社会資源を把握しづらい状況にあることも事実である。

当院では、10年前、小児がん終末期のお子さんの“家に帰りたい”という一言を契機に、小児在宅移行をスムーズに繋げるために必要な支援部門を院内に設置した。その後、県行政の協力を得ながら、医療的ケア児と家族の在宅移行支援に加え訪問診療機能、小児在宅支援に関わる人材育成研修事業、地域社会資源の開拓などを担うセンターへと展開するに至った。

現在まで行ってきた様々な事業の中で特筆すべきこととしては、県内に住む医療的ケア児とその家族を支える4つの地域ネットワークの設置・支援に関わる事ができた。その結果、県内全ての市町がいずれかのネットワークに所属し、行政をはじめ多機関・多団体が参加し、一事例を丁寧に議論し、課題に応じて繋いでいる。また、人工呼吸器を利用する子どもを中心とする高度医療的ケア児のレスパイト事業も、地域ネットワーク内で広がりつつある。

今後、主に地方における大学病院が、地域における小児在宅医療連携の“ハブ”として機能していくためには、「地域・社会貢献」の一環として、各地域の抱える課題を把握しながら取り組んでいく必要がある。

本シンポジウムでは、医療的ケア児の在宅生活を支える地域医療連携体制整備において、大学病院が地方自治体行政と協力して担うべき役割について、私どもが取り組んできた事業内容を踏まえ皆さんと議論したい。